随想

茶をのむ

八木三男

一、現代の「茶の湯」

柳宗悦に『「茶」の病い』（一九五〇年）という比較的長い一文がある（『柳宗悦茶道論集』岩波文庫）。そのなかで、現代の茶人といわれるものの多くが俗物で、茶器の良し悪しの判別をほとんど道具屋に依存して、それらに対する独自の眼力もなければ、どだい「風流」を解するものもほとんどいない、といったうえで、茶室の露地を一歩出ると、「茶人」の「茶」が消えていく、と慨嘆している。日常生活と「茶事」があまりにもかけ離れていて、多くの「茶」には嘘があるというのだ。

たとえば、禅僧の墨蹟などが掛けてある「わび」「さび」の茶室をでて、茶人の居間にうつると、番茶がでたとして、急須や茶碗は月並みで、調度も俗なら、床の置物はふた眼と見られぬ彫り物といった具合だ。日常生活に「茶人」としての美意識が貫かれていない。「不断の『茶』、茶室でない折の『茶』」にこそ茶の意義がなければならない、と柳はいうのである。

戦後数年で書かれた柳のこの一文は、封建的な家元制度をも批判し、峻厳で妥協を許さない気迫に満ちたもので、当時センセーションを巻き起こしたものらしい。当時としてはその批判は画期的だったのだろうが、今からみると、職業的乃至趣味的「茶人」の日常を知らないわたくしから見ても、すべて想像の範囲である。新味といったものはなく、そこではひどく当たり前のことをいっているように思える。つまり、戦後の「茶

の湯」のいっそうの繁栄のなかで、その批判の観点はいまや常識化して、現在もそっくり有効性をもっているということであろう。

一五世紀を画期として日本人の美意識は劇的に変化し、「茶の湯」を通じてそれは洗練されていった。一四世紀に吉田兼好はすでに「花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかは」といい、祭の本質はむしろ殷賑・喧騒の翌朝の都大路の荒寥にあると論じた。一五世紀末「茶の湯」の祖村田珠光の「雲間もなき月はいやにて候」といういい分は、すでに非対称の美や陰翳などの美意識への主張だった。

五〇年もむかし、わたくしは学生のころから二十代を通じて、日本の一五、六世紀の農民闘争や能・狂言などの民衆芸能の興隆に関心があり、林屋辰三郎などの著作を介して、郷村制の一つの基盤をなす「茶寄合」やひいては「茶の湯」「茶書」など特に禅宗の影響のなかで簡素や孤高、「わび」といったものに美を求める、応仁の乱を画期とする日本的美意識の変容を知った。

二、「忙中閑」としての茶の湯

柳の一文は職業的な「茶人」や自称「風流人」に対してはきわめて厳しいものだったが、「茶の湯」には、柳がそこではふれなかった本質的な重要な側面がある。

わたくしはかつて囲碁の勝敗にかこつけて、敬愛する碁友にあてた書簡の形式で「市中の隠」という一文を草したことがある（拙著『市中凱風』一九九七年）。

村田珠光の甥、宗珠の六条堀川の茶室を世間の人は「山居ノ躰尤モ感アリ、誠ニ市中ノ隠トイフベシ、当時数寄ノ張本ナリ」といった。街の雑踏や喧騒のなかでも草庵の趣はまるで山居しているかのようだというのだ。遁世の草庵ではなく、喧騒のなかの草庵、つまり「市中の隠」の「茶」にこそ「茶の湯」の本質があるということである。二畳や四畳半の茶室は非日常空間であり、いつもそこに閉じこもっていては寂寥に耐えがたいだろう。そこは日常の煩わしさや繁忙に疲れた人が気持ちを癒すための空間でなければならない。いわゆる「忙中閑」である。

もうひとつ茶室には重要な原理がある。茶室は戦国武将たちが集まってひそかに邪悪な陰謀をめぐらした密議の舞台でもあったろうが、それはともかくとして、本来はそこは「なごみ」の小世界だということである。「茶」で重んじる「和敬清寂」において「和」が最初に

おかれるのはその意味である。

茶室に入るには身分の高下を問わず、狭いにじり口から身をかがめて入らなければならない。サムライは刀を外に預け、ガンマンも拳銃を置かなければ入室を許されない非武装の世界である。そして茶室に入ればそこではみな一視同仁、身分の上下がない、和やかな談笑が行き交う小宇宙である。

柳がいうように、あまり鑑識眼のないような人たちが道具をしたり顔で褒めあう儀式は嘘っぽいが、茶室でのしかつめらしくもったいぶったように見える所作や礼法は歴史的に長い時間をかけて合理的に洗練されてきた面があり、ひとつの重要な文化であるから、それは尊重されなければならないだろう。

以上のように考えてくると、現在、茶室にもっとも必要なのは日常の繁忙から逃れて、いっときにしろそこで気持ちを癒せる「忙中閑」の機能でなければならないと思われる。静かでゆったりした茶室の雰囲気は日常繁忙でゆとりのない生活を強いられている人たちにこそもっと開放されなければならないだろう。とくに若い人たちのために必要だ。そこで上等な抹茶を飲んだら病みつきになるほどおいしいし健康にもよい。ただしそれは不当といえるほど高価である。しかし安物の抹茶ではかえってお茶が嫌いになる。

また、リラックスした茶室にするためには当然普段着の茶会でなければならないだろう。村田珠光らが経験した初期の茶会は「淋汗茶湯」といって茶の湯と風呂が結びついた民衆的な「茶寄合」のひとつの型なのであり、むしろ猥雑な世界なのであった。「淋汗」は汗を淋すと訓む。

このように、慣れない人が敬遠しがちな茶道における伝統的な作法や所作など難しげな部分を捨象して、茶道を抽象化すればその本質が立ち現れる。喧騒から離れた「清寂」で非武装の空間、分けへだてのない一視同仁の和やかな談笑、おいしい喫茶、である。これらは日常誰もが希求してやまない普遍の原理であろう。

三、おいしくお茶をのむには

大そうな「茶席」は知らないが、わが家の座敷は数奇屋（茶室のこと）造りで、嫂がそこで茶の湯を教えていたから、「茶」の実際の概略は承知している。しかし、わたくしは「茶の湯」はおろか普段は「抹茶」をたしなむこともない。

ここで茶というのは玉露、煎茶や茎茶、芽茶などの普通の緑茶のことである。これらの茶をうまくのむにはどうしたらよいか、ひどく日常的で簡単なことをいおうとしているのである。

わが家を訪れた人に例外なくわたくしがお茶を出してさしあげる。妻はわたくしが茶の出し方が上手だといって、自分では関わらない。ほとんどの客人はわたくしのお茶をとてもおいしいという。

ある日、教員を退職して間もない友人が訪ねてきて、わたくしがいれるお茶がおいしいから、同じお茶を取り寄せたいので紹介しろといった。彼はいつも超多忙で、退職後も上下を走ってあるく生活をしていたから、そんな状況ではどのみちお茶をおいしく飲む条件はないな、と疑った。その彼に示す意味もあってこの文章を書く気になった。したがって、この小文の主題はここからであり、昨年書いた「日本人の食事とその様式」（『教育情報』七九号、〇四年）のいわば姉妹編である。

通信販売で宇治からとり寄せるわが家の茶は、まとめ買いには割引きもあって、概ね一〇〇グラム七〇〇円から一〇〇〇円前後の変哲のないものである。ただ、七、八年の取引の上客ということで、ときどき割引券をくれる。そんなわけで、玉露といっても最下級のそれであり、煎茶も高級すれすれのものだ。

緑茶は厳格に値段の高いものほど味がよい。煎茶なら通常一〇〇〇円以上を高級茶というようだ。いまは種類も多く、在来種のほかに、生産農民的な「荒茶」もあれば、八〇度くらいの熱めの湯で玉露を楽しむ「熱湯玉露」もある。最近の嗜好を反映したものだ。

わたくしは日常茶を好んで飲む。一日に急須に三、四回は茶を入れ替える。仕事場である書斎には茶道具をおかず、仕事に倦むと居間にいって茶をのむ。玉露や煎茶は湯冷ましをかけ、それぞれにふさわしい温度で、手のひらで急須を包み込むように適当な時間をかけながらゆっくり茶をたてる。人数分に等分に注ぎ分け最後の一滴まで出し切る。個人用は小さめの急須に茶葉一回八グラムくらいの分量である。お茶はたて方によって全く違う味になる。

うまいお茶をのむとはただこれだけのことだ。忙しく立ち働いたりしたまま、余裕のない心理状態でそそくさと茶をたてるのではうまいお茶にはならない。「茶の湯」でも急須でたてる茶でも同じことで、どんなに忙しい人にとっても茶を飲むときだけでも「忙中」に

「閑」がなければダメなのである。

わたくしは元来が忙しそうに立ち働くたちではなかった。いわゆる忙しがり屋ではない。分刻みの忙しさだなどと誇示するのは、なかには事実の人もいるだろうが、大抵は嘘だと思ってしまう。有用な人間だと人に思われたいだけだ。分刻みで働いていたらそのうちに死んでしまう。忙しがり屋は畢竟グルマンにはなれないと『美味礼讃』のブリア・サヴァランはいっている（「日本人の食事とその様式」参照）。

教員を退職して間もないころ、庭から見上げる高い秋の空を白鳥の群がカァーウ、カァーウとわたっていく姿をはじめて見た。大方村上の郊外にある大池目指してシベリアからきた白鳥たちだろう。そんな光景は昔からあっただろうに、大して忙しい教員生活でもなかったにもかかわらず、気持ちがそんなものに向いていなかったのである。自然の美しさや無為の時間のすばらしさにほとんど気づかないできたように思う。

ここ数年、大病をやり、さらに難病を患ってから出歩く機会がめっきり減った。いまはものを考える時間も、ものを味わって食べる時間も随分と増えた。気持ちにゆとりができて、まえよりうまいお茶が飲めるようになったということだ。

このごろは、勝ち組とか負け組などというけったいな言葉がはやる。教育でも、社会の急速な変化に適応する能力の育成、競争が教育の基本だなどといって、経済のグローバリゼーションのなかの企業的市場原理をあからさまに教育のなかに入れ込み、無駄のない効率的な学校運営こそが急務であるかのようにいって、教育の機会均等にむきだしの敵意を表明する権力による教育政策が横行する。こんなことに振り回されていたのでは、うまいお茶が飲めるわけがない。人間らしくお茶を飲むには、そのときだけでもゆったりとした気持ちと時間がどうしても必要だ。

いずれにしても精神を何らかの方法で解放することによって、前著『予後の風色』で引用したポール・ヴァレリイの言葉ではないが「時間的閑暇と異なってどんな多忙な人でも持つことができる内面的な閑暇、それによってのみ、あらゆる生命は凝集すると同時にまた発散することができる」。権力が主導する競争的な人生のなかにいつまでもどっぷり浸かって、忙しがっていたのでは、人格的成熟もなかなか得られず、人生を台なしにするかもしれないということであろう。

（やぎ　みつお・にいがた県民教育研究所所長）